

水曜通信13

東北学院宗教センター編

2021年
12月

LIFE

LIGHT

LOVE



「最後の晩餐」

(マルコによる福音書 14:22-26)
田中忠雄作 1987年

「主の晩餐」の場面。

イエスは最後の晩、弟子たちと共に食事をし、パンと杯を弟子たちに与えた。一番奥にいるのがイエス。

第7回

泉キャンパス礼拝堂
ステンドグラス紹介

コロナ禍からのエクソダス

新型コロナウイルス感染症の拡大から2年を迎えようとしている。しかし、ワクチン接種が進行したせいか、このところ感染者が急速に減少している。

この間、東北学院の各設置校は対応に追われてきた。とりわけ、広範な行動半径をもつ1万1千人もの学生が在籍する大学は、多くの授業において遠隔方式を余儀なくされた。それにより知識の伝達という大学としての最低限の役目だけは果たすことができた。そして教員も学生も安全な場所に居ながら、授業を提供し、卒業単位が取得できるという利便性に慣れてきた。またログに記録させることができるので、学生の学修履歴を捕捉できるという可能性も見えてきた。

だが、本院の「建学の精神」であるキリスト教による人格教育が目指す学生の成長の姿が見えてこないのだ。いく人かの学生は遠隔授業により友人と出会えず、孤独や絶望の淵にあるのではないだろうか。

「夜明けは近づいている、しかしまだ夜なのだ」(イザヤ書21章12節)。



東北学院宗教センター所長(院長・学長) 大西 晴樹

次回：第48回水曜公開礼拝(公開オンライン礼拝) 12月22日配信予定

学校法人東北学院ホームページをご覧ください。

【第1部 礼拝】

説教：松本 宣郎(前理事長・院長)

奏楽：加藤 晶子(本学礼拝オルガニスト)

【第2部 音楽による賛美】

演奏：加藤 晶子



第47回 水曜公開礼拝報告（説教：木村 純二、奏楽：今井 奈緒子）

2021年11月8日（月） 公開オンライン礼拝

讃美歌：187番「主よ、いのちの」
聖書：ヨハネの黙示録 3章20節
讃美歌：312番「いつくしみふかき」
説教：「イエスと共にする食事」
頌栄：544番「あまつみたみも」



【説教要旨】

福音書には、徴税人らと共に食事するイエスをファリサイ派の人が非難する話が載せられています。食事を共にすることが親しい間柄を意味するからこそ、ファリサイ派はそれを拒否し、イエスは実行するわけです。「義に飢え渴く人々は、幸いである。その人たちは満たされる」という言葉に示されているように、イエスの備えた食事には肉体的な飢えを満たすためだけでなく、虐げられていた人々の心を満たす霊的な意義があります。

コロナ禍での規制が続き、心置きなく会食を楽しむ時が待ち望まれますが、イエスと共にする食事の霊的な意義に思いをいたし、日々の食事の場で祈りを捧げ、イエスを迎え入れることを忘れずにいたいと思います。（本学文学部教授 木村 純二）

前奏：J. S. バッハ コラール編曲「われら悩みの極みにありても」BWV668a

後奏：J. S. バッハ コラール編曲「平安と喜びもてわれは逝く」BWV616

前奏、後奏ともにJ.S.バッハによるコラール編曲です。「われら悩みの極みにありても」はヴァイマル時代に編まれ、ライプツィヒで「汝の御座の前に我進み出でて」と題名を替え推敲半ばにしてバッハは天に召されました。「平安と喜びもて我は逝く」は「シメオンの賛歌」がドイツ語のコラールとなったものです。

（本学教養学部教授・大学オルガニスト 今井 奈緒子）



礼拝後、音楽による賛美（オルガン独奏・奏楽：今井 奈緒子、独唱：高橋 絵里）

1. J. S. バッハ 教会カンタータ《神の時は最善なり》BWV106より 第1曲ソナティーナ
2. 同 コラール編曲《装いせよ、おお愛する魂よ》BWV654
3. G. フォーレ 《レクイエム》より「ピエ・イエズ」
4. G. F. ヘンデル《メサイア》より「私は知る、贖い主が生きておられるのを」

11月は、先に神の御許に召された人々を憶える季節です。葬送の機会に用いられる歌やオルガン曲をお届けします。バッハの教会カンタータ《神の時は最善なり》BWV106のソナティーナは、リコーダー2本をヴィオラ・ダ・ガンバと通奏低音が伴奏する前奏曲。



「装いせよ、おお愛する魂よ」のコラール自体がとても抒情的ですが、バッハはそれを更に美しく装飾しオルガンに歌わせました。

フォーレの「ピエ・イエズ」はオルガンとハーブ、弦楽器が彩る清澄な調べです。

ヘンデルのオラトリオ《メサイア》の第1部は救い主の降誕、第2部は受難、そして第3部は死と永生を扱っています。「私は知る、贖い主が生きておられるのを」は、第2部がハレルヤコーラスで締めくくられた後の第3部冒頭に置かれ、曲半ばに～キリストは甦られた！～と宣言するように歌われます。



（今井 奈緒子）

東北学院の草創期 (12) 「最初の学生」

— ③ 松田 順平 —

松田は会津の出身です。福島で押川と出会い、仙台神学校創立の1886年5月に福島講義所で押川から洗礼を受けました。その年の10月には神学校に入学しますが、2年後の1888年には許可なく神学校を退学して東京に行き、組合教会の講義所を担当して、新潟襄と親密な交流を持つようになります。

新潟の死後(1890年)も、新潟県長岡の組合教会の講義所で伝道していた松田は、1891年には神学校に再入学を願い出て復学し、仙台教会の長老に選出されます。社会問題への関心が高かった松田は、他の神学生と共に廃娼運動や貧民救済に奔走し、1891年10月の濃尾大地震では震地伝道隊に参加して救済と伝道に挺身しました。そこで孤児救護への関心に触発された松田は、翌年神学校を退学して仙台孤児院を設立します。しかし半年後にはその孤児たちを北海孤児院に預けてしまいます。

常に高い問題意識を持ち行動力に富みながらも、持続性に欠けるという重大な欠陥を持つ松田は、その後伝道者として日本基督教会の伊勢津、鶴岡、名古屋、越谷を転々とし、1910(明治43)年頃からは級友の島貫が始めた移民事業に従事しました。1916年に開かれたシュネーゲターの叙勲祝賀会にはわざわざ福岡から駆けつけて、恩師への思慕の念を表したことが『時報』に記録されています。(東北学院史資料センター 日野 哲)



ランカスターに保存されていた写真(23歳当時)

— 建築が語る東北学院の歴史 (7) —

現在(2021年10月～11月)、土樋キャンパスの礼拝堂で空調設備の更新工事が行われています。老朽化した既設の暖房機器(講堂内外に設置されている鑄鉄製のラジエータ: fig.1)を撤去して新しい機器に置き換える工事ですが、この過程でいくつかの新しい知見が得られました。

とりわけ重要な発見は、その大部分が、献堂当初(1932年)のものである可能性が高いことを確認できた点です。機器の刻印から製造元も判明し、これらが現在も経営を続ける「株式会社 前田鉄工所」製であることが分かりました(“MAEDA IRON-WORKS”の文字と、その頭文字(M, I, W)を組み合わせたロゴマークが見えます: fig.2)。明治時代に創業された前田鉄工所は、関東大震災後に、日本初の暖房用鑄鉄製放熱器の製造に成功した会社として、知る人ぞ知る老舗企業です。

礼拝堂の建築は米国人建築家(Jay H.モーガン)によって、その暖房設備はドイツ人暖房技師(A.P.テーテンス)によって設計されました。こうした建築にあって、献堂時から国産の暖房装置を用いていたことが確認できれば、この建築の誕生の物語に、また一つの興味深い事実が書き加えられることになるでしょう。取り外された機器の一部は、ひとつ本学礼拝堂のみならず、日本の空調設備技術の歴史を語る重要な証人として保存されることが決まっています。

(工学部 崎山 俊雄)



fig.1: 講堂の窓台に組み込まれていたラジエータ

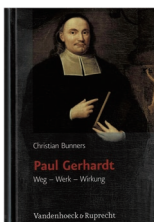


fig.2: 刻印とロゴマーク

ゲルハート記念室とパウル・ゲルハルト (3)



1974年ライブチ刊行
バッハ歌詞全集



2006年再版の評伝

作曲家 J. S. バッハが最も好んだ作詞家はルターでした (20曲)。ついでパウル・ゲルハルトです (19曲)。3番目が、ゲルハルトと同時代のヨハン・リスト (Johann Rist) で9曲ですから、ルターとゲルハルトの歌詞の選択は圧倒的です。ゲルハルトの約300曲に及ぶ作詞の中、最も有名な賛美歌は、受難のイエス・キリストを歌った讃美歌136番の「血潮 (ちしお) したたる主の御かしら (O Haupt voll Blut und Wunden)」です。バッハの『マタイ受難曲』で最も重要な賛美歌として7回も歌われます。また同じくバッハの『クリスマス・オラトリオ』の中でも、重要な受難のモチーフとして使われています。

なぜ降誕の喜ばしい曲の中で、悲しい受難のコラールを歌うのでしょうか。主の降誕は主の死を予測しています。人として生まれたのですから、当然、イエス様は死ぬことになります。そしてそれによって神の世界と人間の世界は繋がりと、回復されます。華やかな『クリスマス・オラトリオ』の冒頭のイエス様の降誕の喜びに溢れたトランペットと太鼓の曲の直後に、このパウル・ゲルハルト作詞によるイエス様の受難の悲しい曲が低く歌われます (第5曲)。そして最後の合唱曲 (第64曲) を聴いてください。繰り返される華やかな喜びの曲の下に、再びこの讃美歌が聞こえます。救済の喜びをイエス様の贖いの受難の悲しみが支えているのです。
(理事長特別補佐 鐸木 道剛)



1907年ライブチ刊行の歌集



1982年刊行
全歌詞集

美術による賛美 (10)



クラナハ(父)画
「マルチン・ルター肖像」
1528年 コーブルグ城蔵

芸術によって神の国あるいは天国は現前しますが、それは天国そのものではないことに注意です。受肉によって被造物は神とつながりますが、被造物が神になるのではありません。

マルチン・ルターは「音楽は神の賜物・贈物なのであり、人のつくったものではないからだ」(桌上語録7034) と言う一方、次のようにも言います。「地上での音楽礼拝がこれほど素晴らしいのなら・・・すべてが完全で、喜びに満ち溢れた永遠の生においては何が起ころうか」(桌上語録4192)。地上の音楽は天国の音楽を表しています。天国の音楽そのものではないのです。

マルチン・ルターのこの芸術の位置付けは、ビザンティン8世紀の第2ニケア公会議でのイコン (聖像) つまりは美術の位置付けと同じです。
(鐸木 道剛)



いのち

ひかり

あい

東北学院スクールモットー
LIFE LIGHT LOVE (いのち・ひかり・あい)

東北学院宗教センター編「水曜通信」
第13号

2021年12月1日発行

〒980-8511 仙台市青葉区土樋1-3-1

発行責任者: 宗教センター主任 野村 信

東北学院宗教センター TEL: 022-264-6558

Email: c.center@mail.tohoku-gakuin.ac.jp